

令和元年5月30日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K11983

研究課題名（和文）病床再編及び原発事故後の組織運営に関する理論の構築 看護管理学事例研究手法の開発

研究課題名（英文）Theory development for organizational management in hospitals following the earthquake-triggered nuclear accident: multiple organizational case study method for nursing administration

研究代表者

武村 雪絵（TAKEMURA, Yukie）

東京大学・大学院医学系研究科（医学部）・准教授

研究者番号：70361467

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究により、個人の語りから個人を超えて存在する職場の現象を描く「複数組織事例研究手法」を開発した。この手法は、個人や施設の匿名性を保ちながら、複数の組織に共通するダイナミクスを詳細に描くことができるため、他の場にも転用しやすい理論を生成できる。本研究では実際にこの手法を用いて、原発事故後に福島県内避難指示隣接地区で稼働を続けた病院で看護師長及び看護師が経験した現象を、個人や施設を超えて共通する職場のダイナミクスとして多角的かつ詳細に描いた。また、この手法を用いて研究を遂行・公表する際に必要な倫理的配慮も明らかにした。「複数組織事例研究手法」は看護管理学の発展に寄与するものと期待される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で開発した「複数組織事例研究手法」は少数事例や固有事例を多角的かつ詳細に分析し、個人の語りのデータから個人や施設を超えて共通する組織現象を職場のダイナミクスとして描くことを可能とする。データ間やデータ内の内容に生じた矛盾に注目し、統合的に説明できる理論を追究するため、他の場への転用可能性が高い理論を生成できる。この手法で研究を遂行する際の倫理的課題と対策も明らかにしたため、協力施設や参加者、及びその関係者を守りながら、現場の事例から看護管理学の知見を析出し蓄積することが可能となった。この手法が今後、看護管理学の発展に寄与することが期待される。

研究成果の概要（英文）：In this study, we developed a method for depicting the phenomenon of workplaces that transcend the individual using the narratives of the individuals. This method can maintain the anonymity of individuals and facilities and can create a theory adaptable to other settings because it describes dynamics common to multiple organizations. Fukushima prefecture experienced radioactive contamination due to the nuclear power plant accident after the 2011 Great East Japan Earthquake. Using our method, we described organizational phenomena as the dynamics of the workplace as experienced by nurses and nurse managers at hospitals that were near but outside the evacuation zone and therefore continued to operate. In addition, in this study we have clarified the measures necessary to avoid damaging research participants, stakeholders, and their relationships to highlight ethical issues when conducting case studies in nursing leadership and management.

研究分野：看護管理学

キーワード：看護管理 組織運営 研究手法開発 事例研究 看護師 東日本大震災 原発事故 自主的避難

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

人々に良質で組織的な看護サービスを提供するために、看護管理者は重要な役割を果たしており、看護管理学は看護管理者に判断の指針を提供する責任がある。しかし、国内外を問わず、人と組織の運営に関する理論は、看護管理学教育でも経営学分野で開発された組織論やリーダーシップ論が主となっている。これらの理論は普遍性があり、看護管理者の日常の組織運営に確かに有用である。しかし、固有の性質や倫理的課題をもつ看護管理の現場により適した理論を構築していく必要がある。

たとえば、東日本大震災による原発事故後、福島県避難指示隣接区域では、多くの住民と同様に看護師も一時的に自主避難し、その後、数カ月以内に戻ったことが報告されている(坂元, 2011; 2012; 山崎, 2011)。災害時に病院看護師が出勤するかどうかは、家族の状況や安全への懸念、専門職としての責任感、組織とのつながり等の要因が関連すると指摘されており(Davidson et al., 2009)。災害時に出勤した職員と欠勤した職員がいることはコンフリクトにつながり、職場や組織全体の士気を損なう可能性があるため、産業保健の立場からの支援が必要だとも指摘されている(Tomczyk et al., 2008)。避難指示隣接区域で稼働を続けた病院の看護管理者は、非常に複雑な状況にある組織を運営する経験をしたと思われる。このような頻度が少ない事例や固有の事例を詳細に分析し、有用な知見を抽出し蓄積していくことは、看護管理学の発展に不可欠だと考えられる。経営学分野では事例研究は「特定の状況下に存在するダイナミクスを理解に主眼(Eisenhardt, 1989)」を置いて理論を生成する手法とされており、看護管理学にも事例研究は有用性が期待される。しかし、複雑な人間関係を含む組織現象を描き出し公表することは、研究参加者や関係者に不利益を及ぼす可能性がある。倫理的課題を解決しつつ、少数の固有の事例から看護管理の現場の複雑な組織現象を描き出せる事例研究手法を開発することは、看護管理学の発展において重要な役割を果たすと考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の2点である。

- (1) 看護管理学分野に特化した事例研究手法を開発する。すなわち、看護管理学分野の事例研究で考慮すべき倫理的課題とその配慮について検討し明確化すること、組織を分析単位とし多様な関係者から多種類のデータを収集・分析し、データ間の矛盾に注目したり複数の事例を統合したりしながら理論やモデルを構築する手法を確立する。
- (2) (1)の研究手法を用いて、原発事故後の福島県内の避難指示隣接区域で稼働を続けた病院の看護組織を事例として分析し、看護師が大きなリスクや強い不安に直面する場面における看護組織運営理論を構築する。

3. 研究の方法

本研究では、下記の方法で実際に事例研究を進めながら研究者間で議論を重ね、研究手法の開発を行った。

(1) 対象施設と参加者

発災当時、避難指示区域近接地区(福島第一原発30~80キロ圏)の病院に所属していた看護管理者及び看護師を対象とした。当初は機縁法にて1~2施設2~3部署の様々な立場の看護職10数名を対象とする予定であったが、看護師の体験が非常に複雑であったため、現象を十分に描くにはより多くのデータが必要だと判断し、十分な匿名性を確保するためにも、機縁法と公募を組み合わせて、より多くの施設から参加を募ることとした。そのため、病床再編事例のデータ収集と分析は中止した。

(2) データ収集

2016年6月から2018年11月にかけて、7施設39名(発災時、看護部長・副看護部長3名、看護師長8名、看護師28名)に平均87分のインタビューを実施した。インタビュー後に同意撤回した1名を除く38名のデータを分析に使用したが、理論構築には、避難指示区域隣接地区として共通する現象を描けると判断した、福島第一原発40~50キロ圏にある5病院の看護師長8名と看護師23名のデータを用いることとした。また、協力が得られた場合、発災当時の勤務表などの資料を閲覧し、データ分析の参考にした。

(3) データ分析

インタビューは許可を得て録音し、逐語録を作成した。個人の語りである逐語録データから職場の現象を描く方法を見出すため、さまざまな視点や方法でデータ分析を行って、その方法で描き出された現象が何かを確認する作業を繰り返した。その後、職場のダイナミクスを描きつつも、十分な匿名性が保証され、外装可能性の高い理論を構築できる方法を整理した。

(4) 倫理的課題の明確化と対策の検討

本研究は、東京大学大学院医学系研究科倫理委員会承認(No. 11176)を得て実施した。しかし、研究を進めながらも、参加者の募集時、同意取得時、インタビュー実施時、データ分析時、学会発表時などの各段階で倫理的問題を研究者間で議論し、必要に応じて外部専門家も加わって対策を検討した。

3. 研究成果

(1) 倫理的課題と対策の検討

分析を進めるうちに、同一組織に所属していた参加者でも出来事の認識は一致していてもその際に経験した感情や他者の行為の解釈は異なることがわかった。また、それぞれが相反する感情を持っており、自身の感情をほとんど誰にも表出せず過ごしてきたことが明らかになった。本研究で得たデータは、参加者らの秘密の開示であり、周囲との関係性にも影響する内容であるため、慎重に取り扱う必要性が確認された。個人や施設を特定する情報を除いても、事例研究ではある程度文脈が描かれるため、協力施設が推定できたり、研究参加者自身が自分に関する記述を見つけ、そこから周囲の反応を知ったりする可能性がある。組織現象を詳細に記述し知見を得ることは重要だが、公表の際は研究参加者や関係者、及びその関係性を傷つけないよう十分な配慮が必要である。対策として、以下の4点を整理した。

十分な説明と自由意思による参加の保証

協力施設の責任者、及び、研究参加者には、研究について十分に説明し、自由意思による参加を保証し、参加しない場合もその情報は施設に伝わらないことを保証する。同意の撤回についても十分に説明し、同意撤回書を渡し提出方法を説明する。事例の引用の仕方によっては、公表前に参加者に内容を確認していただくことを検討する。

秘密の保護に関する最大限の努力

事例研究を行うためには、同一部署から多様な立場の看護職に参加してもらう必要があり、協力施設の責任者から候補者を紹介してもらい、施設内の個室でインタビューを行うことが主となる。その場合、候補者が誰かを知る者は最小限の範囲に留めるよう依頼し、最終的に面接に協力したか否かは紹介者や責任者にも伝えないことを説明し同意を得る。

個人や施設属性を提示せず、集団・複数事例として統合した結果を提示

事例研究であっても複数の施設から多くの参加者を募り、公表の際は複数事例を統合した結果として記述する。公表する内容からは、施設や所属部署、個人を推定させる記述は排除し、協力施設の責任者や紹介者であっても、記述から部署や個人が特定できないようにする。また、研究参加者が自分の語りをみつけた場合も、自分の関係者の語りは特定できないよう留意する。研究参加者の属性の一覧や根拠データへの参加者IDの付与は行わず、結果の解釈に不可欠な属性を全体の傾向や分布として提示することに留める。

構造的背景を含めた描出

多様な立場の研究参加者を募り、面接や資料など多種類のデータを収集し、組織内外の状況を多角的に把握するよう努める。データ源による齟齬や矛盾を統合的に説明できる視点を見出し、個々の選択や感情に影響を与えた構造的背景を含めて描くよう努める。

(2) 研究手法の検討

本研究では、複数の組織から得たデータで、共通する職場の現象のダイナミクスを描くことを目指した。個人の主観である語りが主なデータとなるが、データから個人を超えて存在する職場に視点を置いて現象を描くため、インタビューでは、参加者が職場の状況、すなわち自部署や自施設、地域の状況や職員たちの反応をどう認識していたかをそのときの解釈や感情と合わせて尋ねることが必要であった。データは、個々の経験、特定の局面、特定の事象、特定の言説、共通する現象など、さまざまな視点で分析を行い、それぞれの分析で描き出したことが何かを位置付けた上で組み合わせで解釈を行った。

このように、組織現象を描くことを目的に複数組織からデータを収集し、複数の手法を用いて現象を多角的に分析した上で職場のダイナミクスを描いていく、この研究手法を「複数組織事例研究手法」と名づけた。

(3) 分析結果

原発事故後の福島県内の避難指示隣接地区で稼働を続けた病院では、看護師が勤務予定日に出勤しないことや休暇や避難を願い出ることがあったことが報告された。職場で「避難」という言葉で括られる中には、避難していない者も含まれ、勤務予定日に出勤したか否かで区別されていた。休んでいた看護師が職場に戻った後、残って働いていた者と休んでいた者との区別は常に意識される訳ではなかったが、職場におけるさまざまな場面で繰り返し意識化されていることがわかった。

また、看護師のデータから、福島原発事故後から数年にわたる看護師の職場での経験を家族構成や経験年数といった個人特性や当時欠勤したか否かに関わらず、共通する体験として、途切れなく移行する2つのコアカテゴリーで描き出すことができた。

看護師長の組織運営については、看護師の自主避難に対処する局面、残った看護師と支え合いながらケア提供を続ける局面、休んでいた看護師が戻り変貌したチームに働きかける局面、職場が日常に戻るのをみつつとらえどころのなさを感じる局面の4つの局面が抽出され、各局面で看護師長が認識していた対処課題は異なり、体験した感情や行動も異なることがわかった。

看護師長の組織運営の4つの局面を他の結果と重ね合わせて解釈することで、個人や施設を超えて共通する職場のダイナミクスを多角的かつ詳細に描くことを実現できた。

<引用文献>

- 坂元和子 (2011): 災害・非常時への対策と病院・看護部運営指針：対応と職員の協働がカギとなる人員マネジメント—東日本大震災を経験して, 看護部長通信, 9, 49-56.
- 坂元和子 (2012): 今なお続く、震災の影響に立ち向かうために, 看護, 64(3), 46-49.
- 山崎達枝監修 (2011): 3.11 東日本大震災 看護管理者の判断と行動 (第1版), 日総研出版, 愛知.
- Davidson, J.E., Sekayan, A., Agan, D., Good, L., Shaw, D., Smilde, R. (2009): Disaster dilemma: factors affecting decision to come to work during a natural disaster, *Advanced Emergency Nursing Journal*, 31(3), 248-257.
- Tomczyk, D., Alvarez, D., Borgman, P., Cartier, M., Caulum, L., Galloway, C., Groves, C., Faust, N. (2008): Caring for those who care: the role of the occupational health nurse in disasters, *AAOHN Journal*, 56(6), 243-250.
- Charmaz, K. (2014): *Constructing grounded theory* (2nd ed.), SAGE Publications Ltd., Los Angeles.
- Eisenhardt, K. M. (1989): Building theories from case study research. *Academy of Management Review*, 14(4), 532-550.

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計5件)

Takemura, Y., Kunie, K., Takahashi, Y., Sato, H. Team management in operating hospitals following the earthquake-triggered nuclear accident in Fukushima: How did nurse managers handle their strained teams? *European Nursing Congress*, 2019.

Takemura, Y., Kunie, K., Takahashi, Y. Acknowledging and re-acknowledging the boundary between groups of nurses in the workplace after the nuclear accident in Fukushima. *46th Global Nursing and Healthcare*, 2018.

Kunie, K., Takahashi, Y., Takemura, Y. Separation at workplace after the nuclear accident due to The Great East Japan Earthquake: Is the classification for dividing hospital nurses accurate? *46th Global Nursing and Healthcare*, 2018.

Takahashi, Y., Kunie, K., Takemura, Y. How nurses recognized their workplace situations when considering whether or not to be at work after the Fukushima nuclear accident: experiences of nurses at hospitals outside the evacuation zone. *46th Global Nursing and Healthcare*, 2018.

武村雪絵, 國江慶子, 竹原君江, 佐藤博子, 駒形和典, 佐々木美奈子, 池田真理, 市川奈央子. 組織を分析単位とする看護管理事例研究に特有の倫理的課題とその対処方法の検討. 第37回日本看護科学学会学術集会, 2017.

6 . 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：國江 慶子

ローマ字氏名：(KUNIE, Keiko)

研究協力者氏名：高橋 好江

ローマ字氏名：(TAKAHASHI, Yoshie)

研究協力者氏名：佐藤 博子

ローマ字氏名：(SATO, Hiroko)

研究協力者氏名：池田 真理

ローマ字氏名：(IKEDA, Mari)

研究協力者氏名：佐々木 美奈子

ローマ字氏名：(SASAKI, Minako)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。